

【第一章】

鉄とガラスによる新時代の幕開け

- ① ギリシヤやローマに憧れた新古典主義
- ② マシン・メイドによる大量生産の時代
- ③ 室内を過剰に装飾したヴィクトリアン・スタイル
- ④ 鉄とガラスによる新時代の幕開け



1 ギリシャやローマに憧れた新古典主義

ヨーロッパにおいて、ロココが終焉した^{しゅうえん}十八世紀後半から十九世紀においては、過去の歴史様式を意識化した歴史主義が、デザインのスタイルとなりました。装飾的で官能的なバロックやロココへの反発によって、ギリシャなどの古典様式を模範とした芸術が、建築だけでなく、絵画や音楽など幅広い芸術分野において主流となりました。この古典様式を模範としたスタイルを、新古典主義といいます。

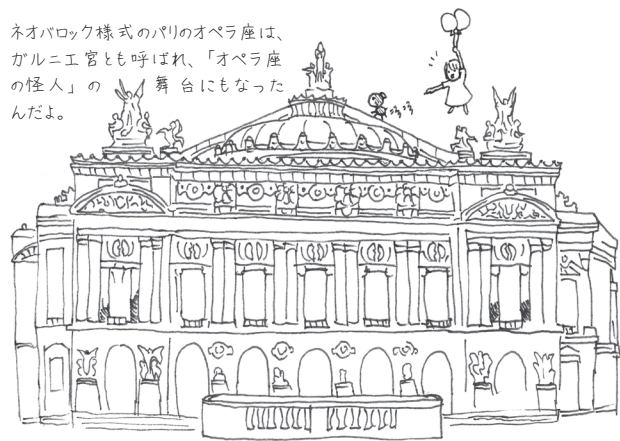
十九世紀頃から、ギリシャ以降の歴史的な建築様式の研究が進みました。新古典主義は、建築を科学的に本質をとらえるという合理的な方法で、建築の美を再現しようとするものでした。過去の様々な様式によって、ギリク・リヴァイヴァル、ゴシック・リヴァイヴァル、ネオ・ルネサンス、ネオ・バロックなどと呼ばれています。これらの様式を自由に組み合わせることも行われ、スタイルを折衷する^{せつちゆう}ことをエクレクティシズムといいます。

古代ギリシャ建築の様式を用いたものを、ギリク・リヴァイヴァルといい、ベルリンのブランデンブルク門が最初のものでされています。ナポレオン一世は、パリを古代ローマ帝国のような首都にしようとして、戦勝記念碑であるエトワール凱旋門^{がいせんもん}や、コリント式

の柱を並べて古代ローマ神殿を模したマドレーヌ寺院などを建設しました。ロンドンの大英博物館の正面玄関も、ギリシャ神殿を模して、イオニア式の円柱が並ぶ新古典主義の傑作のひとつとなっています。

イギリスにおいて、建築家オーガスタス・ウェルビー・ノースモア・ピュージンは、墮^だ落した当時の社会を変革しようとして、中世を理想の社会モデルとし、中世ゴシック様式で教会などを建築しました。それらはゴシック・リヴァイヴァルと呼ばれ、ピュージン設計のセント・ジャイルズ教会や、チャールズ・バリー設計のイギリス国会議事堂が代表作で、その後ヨーロッパ各地にも広がり、ケルン大

ネオバロック様式のパリのオペラ座は、ガルニエ宮とも呼ばれ、「オペラ座の怪人」の舞台にもなったんだよ。



l'Opera